****
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」　第 133 号
−環境・農業・食べ物など情報の交流誌−
2004.05.06（木）発行　　山崎農業研究所＆編集同人
＜キーワード＞
環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所＆『電子耕』編集同人が編集・発行。
http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm
**********発行部数　1628　部**********

□　目　次　　□----------

＜今週の提言＞農村における諸体験活動について　中川昭一郎
＜読者の声＞丹羽さんから
＜旬を食べる―野良からの便り・１＞“たけのこ”　小泉浩郎
＜日本たまご事情＞Factory Farm　愛鶏園・齋藤富士雄
＜山崎農業研究所情報＞
◇『21 世紀水危機―農からの発想』を読む（その 15）　田口　均
　……池上甲一著「水危機が世界をおびやかす」
＜私の農的生活・11＞全国ブルーベリー山地シンポジウム　石川秀勇
＜不定期エッセイ・79 歳の独り言＞
イラクの実情を知らせてくれた日本人人質　原田　勉
＜丹羽敏明の戦争体験＞33　「虜囚のうた」の出版
＜農文協図書館情報＞農文協図書館・原田太郎
＜農文協イベントニュース＞　現代農業読者のつどい 2004 年 6 月
＜編集後記・同人の近況報告＞４月 16 日ー５月５日

＜今週の提言＞農村における諸体験活動について

近年、都市では自然や農業を直接見聞し体験する機会が失われ、これが青少年の心身の健全な発達を阻害している大きな要因と考えられている。このため最近では青少年に自然体験や農業体験などをさせる各種の試みが、都市サイドとも連係しつつ全国各地の農村で盛んに行なわれるようになってきている。

ディズニーランドや六本木ヒルズに象徴されるような都会的施設での遊びがもてはやされている一方で、このような農村における諸体験活動にも関心が高まってきたことはたいへん喜ばしいことであり、農業・農村にかかわる者たち

は、それぞれの立場や得意とする分野で、その推進・普及に何らかの役割を果たすことが求められているのではなかろうか。

　ただし、現在のところ、自然体験・農体験・農業体験といってもその内容や相互関係については、それが整理されないままにその時々の思いつきによって各種の行為がなされているように思われる。今後この各種体験活動をさらに推進するためには、それぞれの位置付け・目的などの共通理解を形成した上で、相互に連係しつつ推進することが必要であろう。まだ十分に吟味したわけではないが、私見としては現在のところ次のように考えているので、字数に限りがあるがご叱声を覚悟で紹介してみたい。

自然体験……山野や里山などにおいて、土地・水・動植物などの自然を直接見聞・体験してその実態や仕組みを理解させ、人間も自然の営みの中の一部であることを実感させること。この場合、日本の農村の自然は人間の営みの加わった二次的自然であり、当然農林業とのかかわりが深いことを理解させることに繋がってくる。

農体験……人間が生きていく上で不可欠な、食べ物を作る農という行為の一部を見聞・体験することによって、農業の自然とのかかわりや生物生産の楽しみや苦労などの一端を知ること。よく行なわれる稲刈り・田植え・芋ほり・乳しぼりなどは、農という行為についての初歩的な体験であり、農を知り親しむ上でのきっかけを与えるものとして位置付ける必要があろう。

農業体験……農業の一連の生産行為を一定の時間をかけて体験し、生業としての農業生産活動の一端を知り、農業への理解を深めること。現在日本農業の大半は機械・施設などをも駆使した近代的産業であり、人力による田植えや稲刈りなどは農体験ではあっても現実の農業体験とは言い難い。本当の農業を知り興味を持ってもらうためには、農業が生命産業であることとともに、近代的な生産現場をも体験することが望ましいといえよう。

中川昭一郎
東京農業大学客員教授・山崎農業研究所顧問
y.noken@taiyo-c.co.jp

＜読者の声＞

=-

●04/26 丹羽敏明さんより：

132 号の配信ありがとうございました。

イラクで拉致された人質５人が無事帰国し胸を撫で下ろしました。人数規模こそ違え私たち復員軍人も捕虜になっていたわけですから人ごととは思えませんでした。それにしても、伝えられる５人やその家族に対するバッシングには、どうかと思われる内容のものがあったように思います。「自己責任」という大義名分をかざしているので他の論調の入り込む隙はないような雰囲気です。しかし政府筋や国会議員の人たちがそれを強調すると、被害者をもう少し温かい言葉で遇してやってもいいのではないか、彼らがイラクでやってきたこと、やろうとしていたことを少しは評価してやってもいいのではないかと同情したくなります。

話は変わりますが、捕虜時代、収容所に内地から援護局の役人が現状視察に来ました。私はその場にいなかったので詳しい様子は知りませんが、現場にいた者の話によると、役人は、原爆で広島や長崎は壊滅的打撃を受けたこと、その他の主な都市もほとんどが焼失したこと、連合軍の上陸により占領政策が施行され国民も復興に全力をあげていること、しかし食料難でマッカーサー元帥の恩恵による放出物資で辛うじて命をつないでいるのが実状であることなどを話したあと、皆さんは幸い壮健で毎日作業に従事しておられ、満足とまではいかないが食事も支給されている、日本にいま帰国しても必ず食えるという保証はない、もし辛抱出来るなら慌てて帰ることはない――といった趣旨のことを話したそうです。

当然これに対して「何を言っているんだ。　お前は捕虜になったことがあるのか、捕虜の苦しみを味わったことがあるのか」　と反発の声が一斉に上がりました。役人は内地の実情を理解してもらうつもりだったのでしょうが、それにしても重労働のためにケガをしたり病気になって多数の者が入院している実態も知らず、また祖国の被害実情がどうあれ家族のもとへ帰ることをひたすら願って苦しみに耐えている私たちへの思いやりの全くない不用意な言葉は、私たちの心情を逆撫でするものでした。

私はイラクで人質になった人たちへの政府やマスコミや一部の人たちの批判

に、かつて私たち捕虜軍人が味わった役人の心なき言動と同じ冷酷さを感じいています。

＜旬を食べる―野良からの便り・１＞“たけのこ”

屋敷裏に 30m2 ほどの竹やぶがある。孟宗竹でいまが旬だ。竹やぶの名のとおり全く放任だが、この季節になると毎年楽しませてくれる。小鳥が囀るなか、探し掘りしたたけのこは、そのまま味噌汁の具となる。

和え物、煮物、たけのこ、どれも季節を感じるが、旬には野趣が加わるとなお良い。掘りたてのたけのこを焚き火に投げ込む。ころあいを見て取り出し、味噌と山椒の芽で食べる。これが美味い。

子供の頃のもう一つの楽しみは、剥いた皮に梅干を挟み、手にもってしゃぶる事だ。20 分ほど経つと、たけのこの皮は真っ赤に変色する。誰が一番赤くなったか競い合う。そのあと赤くなった全部をしゃぶる。そんな遊びもあった。

１週間前、京都を訪ねたら、市場の八百屋で１本１万円のたけのこを見た。せいぜい 500g、「京白子筍」とある。京都洛西塚原で取れるたけのこで、白い地肌と甘さが日本一だという。その頃、わがむらのたけのこは、キロ当たり 50 円、それでも、わが家のたけのこは一番美味いと、北の方の親戚や知人へ送っている。

小泉　浩郎
山崎農業研究所事務局長
y.noken@taiyo-c.co.jp

＜日本たまご事情＞Factory Farm

牧歌的な「放し飼い養鶏」に対して、最近の集約的ケージ養鶏を「Factory Farm」と呼ぶ人たちがいる。特に動物愛護運動の盛んなヨーロッパの国々ではそれは格好な非難の対象とすらなっている。つまり畜産が企業利益の対象となり、利益追求のための過密飼育と劣悪な環境は動物虐待になっているという主張だ。

一方日本でも今回の鳥インフルエンザをきっかけに、このような病気が世界的に流行するのは養鶏の飼育方法が過密で無理があり、そのために病気に対する抵抗力が弱くなってしまったという人たちがいる、なかには一般受けを狙って「だから Factory Farm は駄目だ」という者まで現われる。

連日テレビで京都の養鶏場の画面が現われ、ケージ飼育は一般の消費者の方々には日頃眼に触れないだけにショックのほうが大きかった思う。「あんな狭いところに閉じ込めて鶏がかわいそう」が先にたってしまうし、「これでは病気も出るわけだ」になってしまう。

いくら私が経験上「鶏の病気ではケージ飼育より放し飼い養鶏のほうが大変だ」と説明してもなかなか納得してもらえない。

昨年早春、オランダ、ベルギー、ドイツを襲った鳥インフルエンザは総計3000 万羽を超える家禽類を皆殺しにしていった。発端はオランダの放し飼い養鶏であった、そしてその後 Factory Farm であろうとなかろうと感染は拡がっていった。

放し飼い養鶏、Factory Farm それぞれ一長一短ある、日本でそれぞれの特徴を生かして両システムの共存は可能である。一方のシステムだけに問題があるわけではない。

齋藤　富士雄
（株）愛鶏園
http://www.ikn.co.jp/

＜山崎農業研究所情報＞

◇『21 世紀水危機―農からの発想』を読む（その 15）
……池上甲一著「水危機が世界をおびやかす」

冒頭、著者は次のように言う。

「生物は食料（栄養）と水なしに生き続けることはできない。人間とて、それは変わらない。だがとくに産業革命以降、いわゆる先進国ではこの当たり前の事実が軽視されるきらいがあった」

1996 年の世界食糧サミットで採択された「ローマ宣言」には、あらゆる人びとが安全な食料を必要なときに必要なだけ確実に入手できる権利をもっており、飢えからの解放はもっとも基本的な人権である、という理念が掲げられている。しかし、ＦＡＯの推計によれば、1997ー99 年になっても途上国を中心に８億 1500 万人という膨大な数の栄養不足人口がいる。

現在約 60 億人の世界人口は、2025 年には 80 億人に達すると予測されている。しかし、第二次世界大戦後の食料増産ののびを支えてきた水源開発が今後も進む可能性は世界的にみてたいへん低い。これ以上のダム開発は期待できず、また、地下水は水位の低下や枯渇の危機に瀕しているからだ。地下水の危機は、小農が利用する浅井戸が使いにくくなることによる貧富の拡大や、塩類集積の進行ももたらしつつある。タイトルにあるように、まさに、水危機が世界をおびやかしつつあるのである。

近年、先進国はもちろんのこと、途上国でも、飲料水や産業用水といった水の都市的需要が増大している。これは、農業と都市との間の水の配分問題につながるが、都市への水需要といっても、「生存のための水需要」と「生活の質を高めるための水需要や産業活動上の水需要」は区別する必要があろう。著者は、現在緊急性が高いのは、「安全な上水にアクセスできない途上国の人びとが最低限“生きるための水”を入手できるようにすること」であると指摘する。

水危機が世界をおびやかす兆候が世界各地で現われている一方で、水取引における市場原理の導入や水供給の民営化によって、この危機をビジネスチャンスにかえようとする動きがある。こうした動きは「コスト・メカニズムで水効率を改善し、水生産性を高めるという無邪気な見通し」に基づいているが、その結果、現在「生きるための水」やその水を基盤とした「生きるための食料」すら十分に手に入れることができない途上国の人々にどのような影響をもたらすことになるか。

水は単なる商品ではない。水は「社会と文化を背負い、“生きる”ことと深くかかわって」いる。著者は、都市や産業の都合に合わせて水開発を行なうのではなく、水に合わせて都市と産業をコントロールすること、また、水を経済

社会に合わせるのではなく、水に合わせた経済社会を構想することの重要性を強調する。ビジネスに結びつかないといって、「生きるための食料」と「生きるための水」にコストを支払うのが困難な多くの途上国民を、切り捨てるようなことがあってはならないだろう。

田口　均
山崎農業研究所会員、編集者
y.noken@taiyo-c.co.jp

池上甲一：1952 年生まれ。近畿大学農学部教授。著書『日本の水と農業』（学陽書房）『アフリカ経済』（共著、世界思想社）

『21 世紀水危機―農からの発想』の内容・構成はこちらから
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/03wadai008.html
本のご注文は山崎農業研究所へ
http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm

＜私の農的生活・11＞全国ブルーベリー産地シンポジウム

日本ブルーベリー協会の主催で、10 年ほど前から毎年度、全国ブルーベリー産地シンポジウムが開催されています。本協会は、生産者農家、食物に関心の強い消費者、大学の先生や研究者、行政機関、流通や加工・利用および種苗等の関連企業など幅広い分野の関係者により、平成 6 年に設立された由です。また会員数は、年ごとに漸増しており、現在約 600 名（うち個人会員が 9 割、法人
会員が 1 割）とのことです。そして、プロというよりは趣味的に関心を深めている者も会員に少なくないようで、自分も平成 11 年度からの個人会員の一人です。

協会の主催でいろいろな活動が実施されていますが、最大の行事が先進産地での全国シンポジウムの開催です。最近 3 カ年のその場所を記しますと、平成 13 年は群馬県川場村（赤城）で、次いで 14 年は盛岡市で、昨 15 年は山梨県長坂町（八ヶ岳）で開かれました。時期は各年とも 7 月 10 日前後の 2 日間です。なお、今年は石川県柳田村（能登）で 6 月末に予定されています。

上記の開催場所のうち平成 13 年の川場村と 15 年の長坂町には、家内と一緒に参加しました。ともに全国から 400〜500 人の参加者（非会員も参加できる）があり、産地の皆さんが主役になっての講演、パネルディスカッション、交流会（夜のレセプション）、そして産地見学（園地をバスで回る）と盛り沢山のことが行なわれました。

交流会に並べられるオードブルといえば、ブルーベリーを使ったケーキなども出されて、それがあっという間になくなってしまうという光景が見られたりします。いわば＜お祭り＞が楽しめるということから家内にも好評で、都合のつく限り今後も一緒に参加したい、と思っているところです。

日本ブルーベリー協会
〒105-0022　東京都港区海岸 1-6-1
TEL.03-3436-6121　FAX.03-3436-5708
ホームページ　http://village.infoweb.ne.jp/~bberry/

石川　秀勇
山崎農業研究所会員、千葉県野田市在住
y.noken@taiyo-c.co.jp

＜不定期エッセイ・79 歳の独り言＞
イラクの実情を知らせてくれた日本人人質

１、イラクで人質になった日本人５人が解放されて非常によかった。
＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾

政府筋では「自己責任」が強調されて被害者たたきが始まった。
だが、この人質事件はマイナスだけではなかった。

この事件で、テレビ・ラジオ・新聞の報道は、一斉に人質を拘束したイラクのファルージャの状況を中東の専門家たちが解説するようになった。
これによって一般の日本人は、イラクが米軍の攻撃によって、どんなに痛めつけられているかがわかった。そして、拘束した犯人グループは、テロ組織ではなく、反米闘争のために立ち上がった民衆だったこともわかった。

　多くの日本人にとって、５人の人質は、イラクの実情を知らせてくれる役割を果たした。

２、アラブのテレビが果たした役割
＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾＾

　イラクにおける人質事件の誘拐から解放にいたるまでのテレビ映像は、すべてアラブの報道機関・カタールのアルジャジーラテレビによるものであった。

　８年前から始まったアルジャジーラは、アラブ世界初の報道の自由を獲得したテレビ局である。すべてのニュースを「まっさきに、包み隠すことなく」アラビア語の字幕付きで報道してきた。これは湾岸戦争の時放映されたアメリカの独占的情報と異なるテレビである。

　このテレビによって、３人の日本人が人質になった時の映像とともに、誘拐犯たちの声明や要求も全世界に放映された。そして、被害者たちが人道支援の活動をしてきたことや、家族の訴えもイラク人に報道された。
　一方、日本の市民グループが政府に自衛隊の撤退を求める行動をしたこと、日本政府がアメリカ側にファルージャ周辺での停戦を呼びかけたことなども報道された。

　これらのテレビ報道が、日本人とイラク人との交流となり、結果として人質解放に結びついたものである。われわれも報道の自由とは何か、他山の石とすべきであろう。

＊参考記事：朝日新聞 4 月 19 日夕刊　文化面
　「アルジャジーラが示す新現象
　　イメージが事実になる　　世論より「情動」が政治に働きかける」
　　　　　　　　　　　　　　多摩美術大学教授（映像論）　湊　千尋

原田　勉
山崎農業研究所会員、電子耕編集同人
tom@nazuna.com
http://nazuna.com/tom/

＊参考リンク
Yahoo!ニュース - イラク日本人人質事件

http://dailynews.yahoo.co.jp/fc/world/japanese_detained_in_iraq/
＠画面下半分にある「関連サイト」欄に
「アルジャジーラ ・ ウィキペディア」とあるページが日本語でアルジャジーラを端的に説明しています。
「なお、誤解されがちだが、アルジャジーラは決して反米メディアではない。」という点が注目です。

Yahoo!ニュース ・ アルジャジーラ
http://dailynews.yahoo.co.jp/fc/world/al_jazeera/

原田　勉
山崎農業研究所会員、電子耕編集同人
tom@nazuna.com
http://nazuna.com/tom/

＜丹羽敏明の戦争体験＞33　「虜囚のうた」の出版

平成６年の某日、作業隊本部の経理責任者(主計大尉)をしておられた本間広美氏から、作業隊で発行していた機関誌に掲載された短歌を特集した冊子の復刻版を、来年が戦後 50 周年になるのでそれを記念して出版したいから手伝ってほしいと依頼があった。本間さんは当時機関誌の歌壇の選者をしておられた(本間さんは北原白秋の弟子だった)ので、当時の文化厚生部に歌集を発行させた。私はその時すでに演芸中隊に配置転換された後だったのでこの歌集の企画には携わっていないが、本間さんには戦友会の監事をお願いしていた関係もあり、喜んでお手伝いすることにした。本間さんから送られてきた歌集は紙質の悪いザラ紙にガリ版刷りの不鮮明なものだった。それに本間さんが手を入れ、それを私がワープロで入力したものを本間さんに校正してもらい印刷原稿にした。本間さんの御自宅へも何度か通い打ち合わせをして最終段階にまで運んだ平成７年１月、本間さんの奥さんが亡くなられ、作業の流れが滞ったっが、何とか作業は完成させた。奥さんが亡くなられた後、本間さんは奥さんの追悼文の作成に情熱を注がれ、その編集のお手伝いをしているうち、本間さんは体調をくずされ入退院を繰り返しておられた。追悼文のワープロ仕上げの原稿を病室まで届けて校正してもらい、上梓にまでこぎ着け、出来上がった本を病床に持参したときは大変喜ばれ、元気を取り戻されたようであった。私が「“虜囚のうた”が出来るまでは頑張って下さいよ」というと、「そうだな、それまで

は死ねないな」と言っておられたが、高齢には勝てず平成８年２月、８９歳で亡くなられた。

私が本間さんの遺志をついで「虜囚のうた」の出版の具体化に取りかかったのは本間さんの１周期を過ぎてからだった。本間さんの「はしがき」は生存中に書いてもらってあったので、あと然るべき人に序文をもらうことを計画、短歌の世界では長老の近藤芳美氏に頼むことにし、承諾を得た。演芸中隊関係の親しい人にも書いてもらうことにした。だいたいの原稿が出来上がったところで委託出版をしている所でいくらで作ってくれるか見積もってもらった。５０部で２００万円だという。私は自費出版を目指していたので出来るだけ経費は安くと望んでいた。２００万円という見積もり結果にはびっくりした。１部の単価が４千円では仮に販売するにしても高すぎる。そこで業者に委託することは断念して自分で出版することにした。これは印刷屋と相談しながらやるので大して手間はかからず費用も５００部で５０万円以内に収まった。但し装丁も手作りなので出来上がりは誠に質素なものになった。問題はこれをどう配るかである。本間さんとの話合いでは、歌の作者に配りたいということだったが、作者の本名も内地での住所もわからないので連絡のしようがない。そこで新聞社に依頼して記事広告を出してもらい読者からの反応を待つことにし、主な新聞社に本を送り趣旨を書いて記事広告の依頼をしたところ、朝日新聞、読売新聞、東京新聞、その他一部の地方新聞が記事にしてくれた。

朝日新聞全国版に載った記事内容は、『復刻された「虜囚のうた」一兵卒の望郷の念、「歴史の襞」の記録』と題し『太平洋戦争が終わった後も、シンガポールの英軍捕虜収容所で２年あまり強制労働に耐えた人々が、ひたすら帰国の日を待ちつつ詠んだ短歌を集めた本が出来た。本間広美、丹羽敏明編「虜囚のうた　シンガポールで苦役に服した日本兵のこころ」。今年が復員５０年にあたるのを機に復刻し、当時の作品がよみがえった。リババレー、ウッドランド両収容所で発行された機関誌紙で、文芸欄に投稿された約三百人の作品千四百余首が、「あぶら灯」「火焔樹」などの表題で歌集としてまとめられた。関係者が日本に持ち帰り大切に保管してきたガリ版刷りの小冊子が今回復刻のよりどころとなった。〇空晴れて八洲の庭に帰りなば原子爆弾の跡耕さん〇傷つかば帰れるものと思ふたび五体を受けし父母に詫ぶ〇すさみたる心悲しも病得て還る友だちうらやみてあり。　こうした収録歌の詠み人はおしなべて職業軍人でも、高級将校でもない。普通の市民である。あらがいがたく戦地に赴き、戦い、そして異国に捕らわれの日々を余儀なくされた。一兵卒の望郷の念、肉親に寄せる思いが、時を経て戦争の理不尽をあらためて痛切に伝え来

る。ワープロで打たれ、装丁も簡素なこの一冊に序文を寄せた歌人近藤芳美氏は、これらの作品群を「歴史の襞々」と名付けている。「無名の無数の兵士らである民衆」の心の叫びこそ、歴史の真実を理解するために忘れてはならない、歴史の襞の記録だ、と。いわゆる前線詠とは別の、もうひとつの防人の歌である。』

本は無償で提供（送料分の切手だけ負担してもらった）することにした。全国から申し込みが殺到した。復員軍人からが最も多く、元日赤の従軍看護婦さんや短歌を趣味にしている御婦人方からの申し込みもあった。とくにシンガポールで抑留された人からはよくぞあの当時の悲惨な記録を公表してくれたと感謝された。今までシベリアの抑留の様子は広く知られていたが、シンガポールの抑留生活の苦難の実態を明らかにしたものはほとんど無かっただけに大変喜ばれ感謝された。「虜囚のうた」の作者からは２、３の方から返事があった。本を送った人からの返信には、御自分の戦歴と、終戦後の行動が述べてあり、これはこれで貴重な記録だった。これを私だけの手許に埋もれさせるのは勿体ないと思い、『“虜囚のうた”に寄せる想い』と題して一冊にまとめて出版し、この本に記載された人々に無償提供した。その内容の一部は『丹羽敏明の戦争体験』の中で紹介した。

＜農文協図書館情報＞（４/27 更新）

★ニュース:「一般に流通していない農業書リスト」2004 プレゼント！
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/sp/200403/news2.html

◆2004.3.1ー3.31 登録の新規収蔵図書
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/01new.html

◆話題の図書：
大熊　孝 著　　農山漁村文化協会　発行
ローカルな思想を創る１『技術にも自治がある』治水技術の伝統と近代
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/03wadai019.html
ときに溢れて洪水をもたらす一方で、田の用水となり、生き物を育み、
泳ぎ遊べる場だった日本の川。近代の治水技術がひたすら解消しようと
してきた川と人との関わりの恢復を鋭く問う先に、地域づくりの方途を見る。

農文協図書館　　IT 担当　原田太郎
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/

＜農文協イベントニュース＞　現代農業読者のつどい 2004 年 6 月

第１回　「勘にたよらない有機農業で高品質・多収―
―自分でやれる土壌診断と施肥設計――」
開催日：2004 年 6 月 22 日（火）ー23 日（水）
http://www.ruralnet.or.jp/tuga20/gakusyu/gn2004_06.htm
（2004 年 11 月第 7 回までの募集要項もこの↑ページにあります。）

「堆肥を使えば土がよくなり、味も美味しくできる。けど、収量が少ない…」。どうして堆肥を使うと美味しいの？ どうして化成肥料より有機だと少収なの？ そういった疑問に応えます。有機質肥料が土のなかで効き出すメカニズムを明らかにしながら、多収高品質に導くノウハウを現場の視点で話してもらいます。

【講師プロフィール】
小祝　政明氏
「らでぃっしゅぼうや」
http://www.radishbo-ya.co.jp/
に出荷する農家でつくる「ラディックスの会」で「小祝塾」を主催。有機農業で収量・品質を高めるために、ドクターソイルによる土壌診断と施肥設計、土つくり、さらに栽培法の指導を行い、各地で成果を上げている。

【開催場所】
信州・つがいけ食農学習センター
http://www.ruralnet.or.jp/tuga20/index.html
（長野県北安曇郡小谷村栂池　農文協栂池センター内　TEL.0261-83-2304）

【開催要綱】
１泊２日（13:00ー翌日の 12:00 まで）。１日目夜は懇親会あり。

【参加資格】
農家、農業関係者（行政・ＪＡ・その他の団体職員）、

食品加工・流通業関係者、教育関係者など。
（＊「現代農業」定期購読者でなくても参加できます）

【受 講 料】
（講師料・資料代・宿泊代等）16,000 円＋懇親会費(2,000 円)。

【主催】
（社）農山漁村文化協会
http://www.ruralnet.or.jp/

【お問い合わせ】
（社）農山漁村文化協会文化部　〒107-8668　東京都港区赤坂７－６－１
TEL.03-3585-1149　FAX.03-3585-6466
mailto:isikawa-h@mail.ruralnet.or.jp

＜編集後記・同人の近況報告＞（４月 15 日～５月５日）

４月 27 日付け日経新聞は、「ＥＵ、全遺伝子組換え作物輸入解禁確実」と報道した。ＥＵは日本とともに食の安全性、環境への影響等から、一定の貿易障壁を設けてきたが、科学的評価の前に経済的・政治的配慮から大きく後退したことになる。

アメリカでは遺伝子組換え作物はすでにダイズで 80%、トウモロコシで 40%を越えている。生産現場では遺伝子組換えか否かは特に意識されなくなっている。消費者もまた日本より楽観的だ。

アメリカの意志や動向でＥＵがなびき、その影響で日本も済し崩し的に同調、そんな流れが大勢のようだ。現在、ＢＳＥ問題は全頭検査でアメリカと対決しているが、これもＥＵの状況を見ている感がある。ＷＴＯ貿易交渉の中核課題である多面的機能も、アメリカに同調しつつあるＥＵの動きで日本の主張が孤立しないか心配だ。

アメリカに追随し、ＥＵの顔を覗うという図式はイラク問題への対応にもあてはまるだろう。政府は「テロとのたたかい」を声高に言い、自衛隊派兵を人道支援と読み替える。世界に誇れる「憲法９条」の行方はどうなるか。
（山崎農業研究所・小泉浩郎）

◎お願い「＜読者の声＞の投稿規定・メールの書き方」

１、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。
２、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
３、１回１テーマ、10 行位に。
４、ホームページを持っている人は、文末に URL を。
５、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。
http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html
インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

◎投稿アドレス変更のお知らせ

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、
y.noken@taiyo-c.co.jp
となっております。投稿される方はこちらのアドレスにお願いします。

次回　134 号の締め切りは５月 17 日、発行は５月 20 日の予定です。
　最後まで読んで頂き有り難うございました。今後もよろしくお願い致します。

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

書名：岩波アクティブ新書 45『メールマガジンの楽しみ方』
著者：原田　勉　定価：735 円　発行日：2002 年 10 月 4 日
発行所：岩波書店　ISBN4-00-700045-X
まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら
http://nazuna.com/tom/book.html

『電子耕』から大切なお知らせ
http://nazuna.com/tom/denshico.html
http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html
＜本誌記事の無断転載を禁じます＞

****

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」　第 133 号

バックナンバー・購読申し込み／解除案内

http://nazuna.com/tom/denshico.html

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html

2004.05.06（木）発行　　山崎農業研究所＆編集同人

mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp

**********ここまで『電子耕』**********

.